

2015 年度「学習状況に関する調査」集計結果について

文責：教務部長 名畑嘉則

本報告書は、教務部が 2014 年度に引き続き、2015 年 9～10 月に本学全学生を対象にアンケート形式により実施した学習状況調査に関して、集計結果を基に若干の考察を加えるものである。

本調査の目的は、学生の学習時間を含めた学生生活の実態を把握することを主とする。ただし、調査に用いたアンケートは、2013 年度に文部科学省国立教育政策研究所が実施した「大学生の学習状況に関する調査」で用いられたものを基礎としたものであり、学習時間・生活時間に関する設問以外にも学習経験に関する設問など様々な項目が含まれている。

本調査においては、一部の設問を本学の実態に合わせて変更したり、本学独自の項目を幾つか加えたりした以外は、概ね国立教育政策研究所による調査の設問項目をそのまま利用した。その理由は、各項目において国立教育政策研究所が公表している全国平均と本学の調査結果を比較することができるようにするためであった。この比較を通じて、本学のカリキュラムや教育環境において全国の大学の平均的水準との間で差のある部分が把握できるのではないかと期待されるからである。

以下、項目ごとに結果を踏まえ、全国平均および 2014 年度の結果と比較しながら記述してゆく。

「ふだんの生活について」

問 1 「1 週間あたりの生活時間」

本設問は、学生が学期中の典型的な 1 週間内において、各項目にどれだけの時間を使ったかを、「0 時間」「1-5 時間」「6-10 時間」「11-15 時間」「16-20 時間」「21-25 時間」「26-30 時間」「31 時間以上」の 8 段階で回答する形式のものである。

「授業への出席時間」については、全国平均では「16-20 時間」の回答が 19.6%で最多であるのに対し、本学では「21-25 時間」が 22.6%で最多であるが、2014 年度の 23.6%からはやや低下した。

「授業の予習・復習等の時間」では、全国平均では「1-5 時間」が 55.2%で最多であるが、本学でも「1-5 時間」が 67.6%と最多であり、2014 年度の 64.4%からは少し上昇した。また、「0 時間」という回答は全国では 15.8%であるが、本学では 12.3%である。「0-5 時間」という枠では、全国が 71.0%であるのに対し、本学は 79.9%と大きく上回り、これは 2014 年度の 75.0%をも上回っている。

「大学の授業とは関係ない自主的な学習」では、全国では「1-5 時間」が 45.2%で最多であるのに対し、本学では「0 時間」が 47.0%で、「1-5 時間」の 38.5%を上回る。2014 年度の 42.4%、41.9%よりも差が広がっている。

本学の学生は全国平均よりも授業は多めに履修しているが、授業外の学修時間はむしろ少なく、大学の授業と関係のない学習にかかる時間も少なめであるという傾向が 2014 年度よりもさらに顕著に表れる結果となった。

「サークル・部活動」では、全国・本学ともに「0 時間」が最多の回答であるが、これを除けば、全国では「1-5 時間」が 27.1%であるのに対し、本学では 31.4% (2014 年度 31.4%)、
「6-10 時間」が全国では 10.0%であるのに対し本学では 15.0%である (2014 年度 13.7%)。サークル活動への取り組みの比重が全国平均より高い傾向は持続している。

「アルバイト」については、全国平均と似たような傾向を示しているが、「0-10 時間」という枠で考えると、全国では 53.6%であるのに対し、本学では 51.2%であり (2014 年度 50.6%)、本学学生の方がアルバイトに時間をかける (11 時間以上) 比率は若干高めである。

問 2 「大学内の施設で過ごす時間」

本設問は大学内の施設で過ごす時間について回答させるものである。施設に関しては、本学は全国調査の項目に挙げられるものと違いがあるため、項目の設定自体をやや異にしている。全国では「図書館・ラーニングコモンズ・自習室」という項目を設けているが、本学においては、2015 年度には文学部にラーニングコモンズが設置されたが、前回調査との整合性に鑑み、「図書館」と「PC 教室・PC 自習室・空き教室」という項目に分けている。全国では「図書館・ラーニングコモンズ・自習室」の「1-5 時間」利用が最多で 47.8%であるのに対し、本学では「図書館」の「1-5 時間」利用が 57.8% (2014 年度 58.3%)、「PC 室」が 56.9% (2014 年度 56.5%) と非常に多くなっている。

「大学での授業について」

問 5 「授業とあなたの関係」

本設問は大学の授業と学生自身のキャリア形成との関連性について問うものである。

「卒業後にやりたいことは決まっている」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が 72.9%であるのに対し、本学では 59.3% (2014 年度 62.1%) と低い。

「大学での授業はやりたいことと密接に関わっている」についても同様に、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が 65.4%であるのに対し、本学では 58.8% (2014 年度 57.6%) と低い。

「授業をつうじてやりたいことを見つけたい」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が 67.9%であるのに対し、本学では 70.7% (2014 年度 69.2%) である。

「自分の人生を豊かにすることに関わっている」は本学独自の項目であるが、「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が 79.5% (2014 年度 80.2%) であり、本学の授業が、学生の人生に大きく寄与していることを示している。

問6「授業への取り組み」

授業への取り組みの態度に関して問うものである。

「興味がわかない授業でもきちんと出席する」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が85%であるのに対し、本学では87.0%（2014年度87.7%）である。

「なるべく良い成績をとるようにしている」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が81.0%であるのに対し、本学では84.6%（2014年度83.4%）である。

「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が62.4%であるのに対し、本学では65.6%（2014年度64.7%）である。

「必要な予習や復習をしたうえで授業にのぞんでいる」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が38.5%であるのに対し、本学では41.2%（2014年度43.2%）である。

「大学の友人どうしで授業の予復習やわからないところの勉強をする」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が58.2%であるのに対し、本学では50.0%（2014年度47.1%）である。

以上のとおり、出席、成績向上への意欲、授業への積極的参加、予習・復習という点ではいずれも本学の平均が全国を上回っており、本学学生の「真面目さ」を示している。ただし2014年度と同様、「友人どうしでの勉強」については全国平均を大きく下回っており、本学学生は個人が孤立した状況で学習していること、もしくは個人での学習を好む傾向があることを示している。

「わからないところがあれば、教員に積極的に質問をする」は本学が独自に設けた項目であるが、「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計は32.9%（2014年度30.5%）で、決して高い数値とは言えない。本学学生の「真面目だが内気」という傾向を示す指標と見られるかもしれない。

問7「授業での経験」

本設問は、授業で経験した（実施された）事柄についての頻度、およびその度数が不足か過剰かを問うものである。

「授業内容に興味をわくように工夫されている」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が67.4%であるのに対し、本学では72.3%であり、2014年度の68.1%からやや向上した。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国57.8%に対して本学46.9%であり、これも2014年度の54.9%からは大きく減少した。

「理解しやすいように教え方が工夫されている」については、全国では「ある程度あつ

た」と「よくあった」の回答の合計が 69.4%であるのに対し、本学では 75.4%（2014 年度の 73.0%から微増）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 57.6%に対して本学 45.4%で、2014 年度の 54.1%から大きく減少した。

「TA などによる補助的な指導がある」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 36.2%であるのに対し、本学では 30.0%（2014 年度 28.1%から微増）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 27.2%に対して本学 17.7%（2014 年度 20.6%から微減）である。

「出席が重視される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 80.0%であるのに対し、本学では 84.9%（2014 年度 87.4%から微減）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 18.0%に対して本学 17.1%（2014 年度 16.0%から微増）である。

「少人数、ゼミ形式の授業」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 50.2%であるのに対し、本学では 56.4%（2014 年度 52.8%からやや増）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 28.6%に対して本学 12.4%（2014 年度 16.8%からやや減）である。

「期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 90.7%であるのに対し、本学では 88.2%（2014 年度 89.2%）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 6.5%に対して本学 2.9%（2014 年度 3.3%）である。

「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 28.7%であるのに対し、本学では 40.7%（2014 年度 46.3%からやや減少）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 55.4%に対して本学 37.8%（2014 年度 40.2%から微減）である。

「授業中に自分の意見や考えを述べる」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 36.4%であるのに対し、本学では 51.8%で、2014 年度の 45.6%から大きく増加した。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 23.0%に対して本学 7.5%（2014 年度 10.7%から微減）である。

「グループワークなど、学生が参加する機会がある」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 48.4%であるのに対し、本学では 65.1%（2014 年度 63.3%から微増）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 27.4%に対して本学 10.5%（2014 年度 12.9%から微減）である。

「主に英語でおこなわれる授業」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 25.6%であるのに対し、本学では 37.4%（2014 年度 37.2%）である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 29.1%に対して本学 11.8%（2014 年度 14.6%から微減）である。

上記のとおり、ほぼすべての項目において、本学における実施度の数値が全国平均を上

回り、不足を訴える回答の割合も全国の数値を下回っている。また、多くの項目で向上と見なしうる数値の変化が認められ（教員による学生への働きかけの機会が増加するという意味で）、本学における授業改善の取り組みがある程度成果を表しつつあるものと見られる。

問8「授業はどのくらい役に立っているか」、「自分の実力」

本設問は、授業が各項目に対してどのくらい役に立っているか（有用性）、および各項目に該当する自分の実力に対して、それぞれ4段階で評価するものである。評価の上位の2段階を+、下位の2段階を-として、大きく二分して集計する。

「将来の職業に関連する知識や技能」については、全国では有用性の+評価が71.1%、実力の+評価が23.8%であるのに対し、本学ではそれぞれ68.0%、23.9%（2014年度67.0%、19.0%）である。

「専門分野に関する知識・理解」については、全国では有用性の+評価が78.9%、実力の+評価が29.1%であるのに対し、本学ではそれぞれ81.1%、29.3%（2014年度81.2%、27.3%）である。

「専門分野の基礎となるような理論的知識・理解」については、全国では有用性の+評価が77.7%、実力の+評価が30.4%であるのに対し、本学ではそれぞれ80.2%、30.2%（2014年度78.3%、27.9%）である。

「論理的に文章を書く力」については、全国では有用性の+評価が55.4%、実力の+評価が33.7%であるのに対し、本学ではそれぞれ65.1%、26.7%（2014年度61.7%、28.6%）である。

「人にわかりやすく話す力」については、全国では有用性の+評価が54.2%、実力の+評価が35.6%であるのに対し、本学ではそれぞれ59.2%、26.4%（2014年度58.5%、25.0%）である。

「外国語の力」については、全国では有用性の+評価が33.6%、実力の+評価が14.6%であるのに対し、本学ではそれぞれ46.6%、16.6%（2014年度46.5%、17.1%）である。

「ものごとを分析的・批判的に考える力」については、全国では有用性の+評価が66%、実力の+評価が43.8%であるのに対し、本学ではそれぞれ62.9%、32.1%（2014年度62.7%、33.5%）である。

「問題を見つけ、解決方法を考える力」については、全国では有用性の+評価が66.5%、実力の+評価が44.7%であるのに対し、本学ではそれぞれ63.8%、34.1%（2014年度63.6%、34.7%）である。

「幅広い知識、もののみかた」については、全国では有用性の+評価が71.9%、実力の+評価が45.4%であるのに対し、本学ではそれぞれ75.4%、37.2%（2014年度73.0%、39.7%）である。

各項目に対する授業の有用性に関しては、全国平均とほぼ同等もしくは上回る評価がなされているのに対して、自分の実力については、各項目とも低めに評価する傾向が見られ

る。項目によっては自己評価が昨年度より大きく上昇し、全国平均を上回ったものがあるが、一方で2014年度よりも数値を下げている項目もあることから、ただちに授業改善の成果と見なすことはできないであろう。

「入学後の経験」

問9「入学後の経験の有無」

本設問は入学後における各項目についての経験の有無、およびその有用性を評価し回答するものである。

「授業の履修方法やカリキュラムについての体系的なガイダンス」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が67.6%であるのに対し、本学では67.6%（2014年度70.5%から微減）である。

「大学での勉強方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が33.6%であるのに対し、本学では38.1%（2014年度37.8%）である。

「就職や将来のキャリアをテーマとした科目」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が52.0%であるのに対し、本学では57.2%（2014年度62.2%からやや減）である。

「資格試験などの受験準備のための科目・講座」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が35.1%であるのに対し、本学では31.8%（2014年度33%から微減）である。

「インターンシップ（現場学習等を含む）」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が25.1%であるのに対し、本学では21.6%（2014年度22.5%）である。

「国際交流センター主催の短期海外研修・ASEACCU など」は本学が独自にアレンジした項目である。全国では「短期の海外留学（4ヶ月～1年程度）」という項目であり、これに対する「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計は4.9%であるのに対し、本学の項目においては7.4%（2014年度9.4%からやや減）である。

「カトリックセンター主催のボランティア」は本学が独自に設けた項目であるが、これに対する「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計は3.8%（2014年度4.5%）である。

問10「入学後に感じたり思ったりしたこと」

本設問は入学後における各項目についての経験の有無を回答するものである。

「授業の内容についていけない」については、全国では「ときどきある」「よくある」の回答の合計が44.7%であるのに対し、本学では38.0%（2014年度39.5%から微減）である。

「専門分野が本当に自分に合っているのかよくわからない」については、全国では「と

きどきある」「よくある」の回答の合計が 49.4%であるのに対し、本学では 50.9% (2014 年度 54.1%からやや減) である。

「できれば別の大学に転学・編入したい」については、全国では「ときどきある」「よくある」の回答の合計が 20.7%であるのに対し、本学では 19.0% (2014 年度 21.9%から微減) である。

2014 年度と比較して、授業についていけないと感じる学生、専門分野とのミスマッチに悩む学生、転学・編入を考える学生がいずれもやや減少しており、ミスマッチ以外の項目では全国平均を下回った。

本学のカリキュラム・学習環境に関する課題

調査結果を通じて浮かび上がる本学学生の学習実態および本学のカリキュラム・学習環境の問題点として、2014 年度の報告書には次の数点を挙げた。

- ①授業外学修時間の不足
- ②卒業後のキャリア形成に対する意識の薄さ
- ③友人とのコミュニケーションによる学修機会の不足
- ④教員とのコミュニケーション形成の不足
- ⑤TA 制度の不足
- ⑥自分の実力に対する自信の欠如
- ⑦資格試験準備プログラムの不足
- ⑧インターンシップの機会の不足
- ⑨専門分野とのミスマッチの多さ

いずれも単年度ですぐに解消できる問題ではないが、各課題に対する教務部の対応策として記したもののうちの幾つかは 2015 年度においてすでに実施に移した。例えば、①に関しては、「シラバス執筆要領」を改正し、シラバスに予習・復習等の授業時間外学修の内容や時間の目安等を記載するよう各教員に依頼するとともに、授業時間外の学修を学生に促すような授業展開を各教員に働きかける文言を盛り込んだ。また、②に関しては、キャリア支援センターにおいて、文学部のカリキュラムにおける「女性とキャリア II」の新設について検討を開始した。

今後は、2016 年度から設置が検討されている「アクティブラーニング推進会議」においても、上記の問題が検討されてゆくことになるものと考えられる。

付記

なお、本学学生の全体を対象として考察する本報告書の作成と並行して、各学科にも 2014 年度と 2015 年度の調査結果のうち当該学科の学生に関するデータの分析を依頼した。各学

科の教務部委員が中心となって分析結果の報告文書を作成していただいたが、分析の方法、および文書の書式には学科によってかなりの相違がある。教務部としては、各学科の自主性を尊重し、あえて形式を統一することはせず、それぞれ個別のファイルの形で公表することとした。ご諒解いただきたい。